

2025年2月17日から21日までの5日間、EAAの先生方と大学院生、そして12名の学生で北京を訪問した。自分自身、北京を訪れるのは2023年夏・EAA Summer Institute以来の、約1年半ぶり2度目。その間浙江省・杭州にある浙江大学での11ヶ月の留学も経験したので、前回に比べ、中国にも、北京にも少しばかり親しみを覚えるような気がする。この5日間石井剛先生から出された作品課題のテーマは「風景」。日々自分のみた風景を考えながら過ごしつつ、他の学生のみる風景も覗き見た5日間であった。

2日目は、まだ少し肌寒い朝にホテルからバスで出発し、丸一日北京大学を訪問。前日東京は雪が降ったとのことだったが、北京大学は東京大学より一足早く春が訪れ、おしどりが泳ぐ未名湖のほとりには、小さな桜が満開に咲いていた。この日最も興味深かったのは、元培書院の内部。前回のEAAの訪問では、元培書院の象徴的な建物である俄文楼を訪れることが多かったが、実際に学生たちが生活する寮を訪問するのは初めてだった。そこでは生活と学びが溶け合い、一つの空間の中に、学生生活が濃度高く詰め込まれていた。

3日目の訪問先は頤和園と八達嶺長城。浙江への留学後初めて頤和園を訪れ、「昆明湖の西湖っぽさ」を感じ取れたことに感動。高校時代の世界史を思い返すと、北京と杭州は、歴代の王朝の皇帝が少しずつ、そして大規模に開発してきた京杭大運河で繋がっているのがあった。21世紀現在の一番速い高速鉄道の便でも6時間かかる場所から、3世紀も前に大量の岩を持ってきてしまうとは、乾隆帝、恐るべしである。

4日目には、清華大学に2つの書院、日新書院と新雅書院を訪れた。午前中は比較的新しい日新書院。挨拶の中で日清書院の先生の挨拶にあった、日中の関係のお話は、近現代史を志す自分の中に刺さるものがあった。日新書院は今年の新1年生から日本語専攻が仲間入りしたそうだ。1年生にも関わらず流暢な日本語を操る姿に刺激をいただいた。新雅書院では、オープンスペースでインタラクティブな対話イベントを開いてくださり、また、対話イベントの後の食事会では、より砕けた雰囲気の中で、新雅書院での学生生活を伺うことができた。

今回の渡航中、一緒に北京を訪問した他の学生の方の作品（前述の石井先生による課題）にも毎日接することが叶った。EAAに集まる学生は、今回訪問した3つの書院と同様かそれ以上に専攻分野が多様で、また少人数であるがゆえに、密度高く異質な存在と交流することができる。ある語学に長ける学生は、長城で漢詩を詠んだ。TAさんの書いた「打油詩」は難しくて7割くらいしか読めなかった。ロシア語TLP出身の学生の作品に至ってはキリル文字であることしか認識できない。毎日綺麗に写真と文章をレイアウトした作品もあり、その人そのものを表現しているようだった。人文地理学の院生の方は、さすが目をつけるところが一味違って面白い。また、今回の渡航があったからこそ北京で再会できた友人もいる。2022年秋にEAAに派遣留学をしており、今は北京大学も卒業している友人は、インターン

に向かう前にホテルまで寄り道してくれた。同様の縁のまた他の友人はあいにく仕事だったが、彼女も久々に連絡を取り合った。また、清華大学で交換留学中の東大の友人とも近況を報告し合えた。

最後になったが、このような訪問と交流の機会を下さった EAA の皆様、北京大学元培書院、清華大学日新書院、清華大学新雅書院の皆様に心から感謝申し上げたい。また 3 度目、4 度目と訪問する際も、今回出会った方々との交流のおかげで、また違う風景を見ることができるだろう。

